離人感と情動メカニズムの関連性について

—情動ストループ課題を用いた実験心理学的検討—

○藤田美穂¹・岡田斉²(会員)

(¹文教大学大学院・²文教大学人間科学部)

キーワード: 離人感・メカニズム・情動ストループ課題

Experiment on emotional mechanism of depersonalisation

Miho FUJITA¹ and Hitoshi OKADA²

(¹Graduate School of BUNKYO, BUNKYO Univ. ²)

Key words: depersonalisation, mechanism, emotional stoop task

目 的

離人症は、疎隔感や非現実感といった健常者にもみられる非特異的な症候群であり、現在においても定義やメカニズムに関する見解は一致していない(木村, 1956; 立山, 1998)。しかし近年、脳イメージング研究から離人症の成因を知覚の変容だとする説(Gralnik, Schneider & Simeon, 2000)と情動変容だとする説(Sierra & Berrios, 1998)の2つが議論されている。後者は扁桃体、前頭前野、前部帯状回の働きにより情動抑制と警戒過剰の2つのメカニズムが同時に生起するというモデルであり、Sierra & Berrios (2000)はこれを基に離人感の測定尺度として Cambridge Depersonalisation Scale(CDS)を作成した。大部(2007)は扁桃体の活動減退が不快感情に関わることを指摘し、Sierra & Berrios(1998)の情動抑制モデルについて、情動ストループ課題を用いた実験的検討を行った。その結果、前半の試行のみを対象として離人感と情動抑制の関連が示され、離人感における不快感情の抑制と扁桃体の活動減退が示唆された。また離人症における情動の働きについて、Simeon, Guralnik, Knutelska, Yehuda, & Schmeidler(2003)は、離人感と不安は相関するが、離人感が重症になるほど不安の抑制作用が働くことを報告している。この他にも Phillips, Medford, Senior, Bullmore, Suckling, Brammer, Andrew, Sierra, Williams, & David (2001)や Phillips & Sierra(2003)は、情動抑制がみられない点で強迫性障害を離人症性障害の比較群として採用しているが、従来離人感強迫傾向との関連が指摘されている(Holander & Wong, 1995)。そこで本研究においては、大部(2007)の実験を基に、不安と強迫傾向との関連においても、離人感が高いほど情動が抑制されるという仮説を検証することを目的に、情動ストループ課題を用いた実験を行った。

方 法

学生 40 名(男性 20 名, 女性 20 名)に対し、個別に実験および質問紙調査を行った。刺激呈示および反応時間の測定には Super Lab Pro for windows を用いた。実験刺激は坂本(2003; 2004)および宮崎・本山・菱谷(2003)の感情価評定を基に選出した、熟語名詞のネガティブ語(NG 語)28 語、ニュートラル語(NG 語)28 語であった。各刺激は色の影響を排除するため、緑、赤、青に彩色され、それぞれ 1 回ずつ呈示されたため、全試行回数は 56 語×3 色の計 168 回となった。質問紙には日本語版 CDS(田辺, 2004), STAI-trait(Spielberger, 1970), 強迫傾向尺度(井出・細羽・西村・生和, 1995)を用い、尺度要因には実験協力者を CDS, 強迫性尺度は平均値を、STAI はカットオフポイント(曾我, 1993)を基準として高群, 低群の 2 水準に分けた。情動語要因は NG 語, NG 語の 2 水準とし、1 セル 84 語の平均反応時間を分析対象とした。実験計画は、①CDS 得点要因(高群, 低群), ②CDS×STAI の得点要因(CDS 高×STAI 高群, CDS×STAI 低群, CDS 低群×STAI 高群, CDS 低群×CDS 低群), ③CDS×強迫傾向尺度(CDS 高×強迫高群,

CDS×強迫低群, CDS 低群×強迫高群, CDS 低群×強迫低群)の各尺度要因と情動語のカテゴリー要因(NG 語条件, NU 語条件)を独立変数, 各条件における反応時間を従属変数とする 2 要因被験者内計画であった。

結 果 と 考 察

①CDS 得点条件×情動語のカテゴリー条件, ②CDS 得点×STAI 得点条件と情動語のカテゴリー条件, ③CDS 得点×強迫得点条件と情動語のカテゴリー条件の各々の反応時間に対し 2 要因分散分析を行った結果、すべての条件において情動語のカテゴリー要因にのみ主効果がみられ、NG 語の反応時間の方が NU 語より長くなることが示された。しかし、その他の要因では反応時間に差がみられなかった。すなわち、不安と強迫傾向との関連においても離人感と情動抑制に関連性は示されなかった。しかし、被験者の内省を考慮し、彩色された情動語のうち赤色の語に対する反応時間のみを対象として、あえて CDS の得点条件×情動語のカテゴリー条件の 2×2 要因分散分析を行った。その結果、CDS 得点と赤の情動語カテゴリーの交互作用のみ確認され($F(1,38)=6.07, p<.05$), Bonferroni の単純主効果検定を行ったところ、CDS 高群において、赤の NG 語への反応時間が NU 語より 5%水準で有意に長くなることが示された。以上のことから、赤の情動語を対象とすると、離人感をより感じる群(CDS 高群)において、NG 語の反応時間が NU 語の反応時間より長くなり、その他の要因では反応時間に差はみられないことが確認された。また、被験者によって課題への誤答数が極端に異なっていたため、情動語の誤答率を検討することを目的に、CDS の得点条件×情動語のカテゴリー条件の 2×2 要因分散分析を行った。その結果、CDS 得点×情動語のカテゴリーの交互作用の有意確率は $p=.09$ (10%水準)で有意傾向がみられた。そのため、あえて Bonferroni による単純主効果の検定を行ったところ、CDS 得点の高群において NG 語の誤答率が、NU 語の誤答率よりも 5%水準で有意に低くなることが示された。このことから、離人感の高い人は、離人感が低い人よりもネガティブ語に対し選択的に注意を向ける傾向にあり、結果としてネガティブ語への反応時間が長くなり、ネガティブ語に慎重となるため正確な判断が可能となることが考えられた。

本実験では大部(2007)の結果とは異なり離人感における情動抑制モデルは示されず、むしろ健常群においては、離人感の高い人は離人感の低い人に比べて脅威情報に対し過剰に反応する傾向にあることが示唆された。離人感のメカニズムに関する実証的研究は、将来的には離人感の定義や診断基準、治療法に有効な知見を与えると考えられる。そのため、今後は認知機能の査定やプライム効果研究など多様な測定法から検討する必要があるといえる。